

教団新報

定 価 1部140円(本体133円+共200円)
予約購読料 1年分 千共 5,000円
紙代のみ 3,500円
振替 00140-9-145275
本紙を購読ご希望の方は、前金を
そえて、お近くのキリスト教書店
へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内 電話03(3202)0546
FAX03(3207)3918
URL http://uccj.org
発行人 長 崎 哲 夫
編集主筆 渡 邊 義 彦
印刷所 株式会社きかんし



弓町本郷教会(東京教区北支区)

イエスは、また、たとえを用いて語られた。「天の国は、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている。王は家来たちを送り、婚宴に招いておいた人々を呼ばせたが、来ようとしなかった。そこでまた、次のように言って、別の家来たちを使いに出した。『招いておいた人々にこう言いなさい。『食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、すっかり用意ができています。さあ、婚宴においでください。』』しかし、人々はそれを無視し、一人は畑に、一人は商売に出かけ、また、他の人々は王の家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまった。そこで、王は怒り、軍隊を送って、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。そして、家来たちに言った。『婚宴の用意はできているが、招いておいた人々は、ふさわしくなかった。だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。』そこで、家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになった。王が客を見ようと入って来ると、婚礼の礼服を着ていない者が一人いた。王は、『友よ、どうして礼服を着ないでここに入って来たのか』と言った。この者が黙っていると、王は側近の者たちに言った。『この男の手足を縛って、外の暗闇にほうり出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』」

マタイによる福音書 22:1～13

王様が王子の結婚の披露宴のために人々を招きまし

た。ところが招かれた者たちはそれぞれ用事があると

言い出して、その婚宴に

来たちに町の大通りに出て、見かけた人は皆婚宴に呼び招いたのです。大通りを歩いていた人にとっては

しょう。いくら王様の息子

とて、見かけた人だけでは驚きなのに、王はその中の一

人か。わたしたち一人一人は、

の招きをしっかりと受けと

は、ただ服装のことを言っ

メッセージ

招かれている今

マタイによる福音書22章1節～13節



菅原 力

わたしたちの人生における招き

それはわたしたちのこの人生における招き、ということなのではないでしょうか。自分が納得でき

つて、わたしたちはその現実の中で今を生きるべく招かれていて、ということなのです。

ことをきかないようになるといつかひとつとつても

キリストの信実の中にある

60才になられた時に、突然難病に罹ってしまった人がいました。大変有能な方で、研究者として活躍しておられた方でした。体が少しずつ動かなくなり、やがて食べ物のみ込むことも

つて、わたしたちはその現実の中で今を生きるべく招かれていて、ということなのです。

ことをきかないようになるといつかひとつとつても

お見舞いに伺った時に、「こんなふうに病気が確実に進行していったら、最後には何もできなくなって家族に迷惑だけかけて、わたしが生きていくことに本当に意味があるんでしょうか」と静かに問いかけてくれました。

つて、わたしたちはその現実の中で今を生きるべく招かれていて、ということなのです。

ことをきかないようになるといつかひとつとつても

キリストに担われた今を生きる

病氣の方にこの主イエスの言葉を語りながら、神さ

つて、わたしたちはその現実の中で今を生きるべく招かれていて、ということなのです。

ことをきかないようになるといつかひとつとつても

返す言葉がありませんでした。言葉が現実の前で押

つて、わたしたちはその現実の中で今を生きるべく招かれていて、ということなのです。

ことをきかないようになるといつかひとつとつても

(弓町本郷教会牧師)



桃園国際空港での盛大な出迎え。
台湾の子どもたちに歌で迎えられ、
福島の子どもたちもキャンプソングで応えた。

初めての海外保養プログラム実施

こひつじキャンプ in 台湾

多くの教会との出会いを経験

2014年1月4日〜7日、福島県在住の親子を対象とした短期保養プログラム「こひつじキャンプ」が台湾で開催され、22名の親子が参加した。訪れる先々で多大なる歓迎を受けた。台湾の玄関口でもある桃園国際空港では、台湾の子どもたちに出迎えられ、私たちが前日に練習したキャンプソングで応えた。

桃園から新幹線で約1時間のところに、今回のキャンプで多くの時間を過ごした「嘉義」がある。日中の気温は22〜23度ですごくしやすく、子どもたちも汗をかきながら動き回った。

1日目と2日目は梅山教会に宿泊した。朝食は梅山教会の方の手作りで、肉まんや水餃子が大変美味しくて子どもたちも喜んでた。今回は多くの教会との関わりが持てたが、中でも林子内教会の焼き芋プロگرامは、子どもたちも保護者も楽しめたようだ。粘土質の土を野球のボールくらいの大きさにして何個も積み上げ、高さ50〜60cmくらいの窯(ドーム状)を作った。子どもたちだけで窯を作ることは大変難しく、何度も崩れてしまい、教会の方々

に協力してもらいながら1時間以上もかけて作り上げた。保護者は、粘土質の土に水を混ぜて泥を作り、新聞紙でまかれた生玉子に泥をつけて泥団子状にする作業を行った。子どもたちが作った窯の中にこの泥団子状の玉子と芋を入れ、1時間後には夕食として頂いた。夕食はもちろんだが、窯を作っているときや泥団子を作っているとき、また、子どもたちが広場で遊んでいるときなど、台湾の方との交流が随所に見られたのは喜ばしいことであった。

また、台湾は温泉でも有名だが、仙草小学校の太鼓の演奏(台湾の小学校で全台湾優勝の実力)で迎えられた後に温泉を楽しんだ。子どもたちと保護者に分かれ、保護者にはゆつくりと温泉でくつろいでもらった。子どもたちは水着に着替えて、温泉に入るだけでなく、プールやドクターフィッシュ風呂(皮膚の角質を食べてくれる小魚がいる、そして泥風呂にも入った。体中に泥を塗り合い、顔に塗って泥パックをするなど終始賑やかな入浴となった。

この日の夕食は関子嶺温泉街の一角にある関子嶺教会の招待を受け交流を楽しんだ。

こひつじキャンプは2012年1月からスタートし、日本基督教団が主催、東京YMCAと会津放射能情報センターが共催として取り組み、今回で9回目を終了した。第1回目のキャンプは富士山の見える東京YMCA山中湖センターで実施した。どのようなキャンプにしていけるかを教団担当者と何度も話し合った。回数を重ねるごとにいろいろなことに挑戦してきたキャンプであった。

このスピーチを含め、このキャンプに参加したことは私自身の今後の取り組み方を考えさせるものとなった。

(松本竹弘報／東京YMCA)

UMCOR、PCTの支援により実現

新年早々、東京電力福島第一原子力発電所事故によって被災した福島県親子22名と共に、台湾で3泊4日の保養キャンプを行った。

1月4日午後、桃園国際空港に到着した私たちを出迎えたのは、台湾の子どもたちの歓迎の歌声だった。そして、PCTの許榮豊議

長、林芳仲総幹事、国会議員の歓迎の言葉に続き、帽子や花の冠などが親子に贈られた。宿舎となった梅山教会は、私たちのために新しい布団や枕を用意し、

朝食には手造りのサンドイッチ、肉まん、餃子など美味しい食べ物を準備してくれた。また、私たちが訪れる先々では、嘉義中会に属するそれぞれの教会が心のこもった食事や楽しいレクリエーションの時を与えてくれた。

3・11より間もなく3年



上、窯作り。ここで焼き芋やゆで玉子を作った。
左、梅山教会の手作り料理(肉まん、水餃子)に、子どもたちも大喜び。

感謝の言葉

平栗静那さん

こんにちは。私は日本の「福島」というところから来ました。東日本大震災の被災地に対する、皆さんからの積極的で長いご支援への感謝は言葉では言い表せません。本当にありがとうございました。

2011年、福島では震災が起きたとほぼ同時に原発事故が起きました。大量の放射性物質

が広範囲に拡散され、それは終わりはわからない「不安と心配の日々」の始まりでした。真夏の間に長袖を着てマスクをし、窓を閉めて、なるべく外には出ないで過ごす毎日。水道の水は怖くて飲むことができず、学校の給食ですら不安で口にすることができませんでした。

でも何より辛かったのは、放射能に対する考え方の違いから友達との心の距離ができたこと。そんなことができるのは何か月ぶりだったでしょうか。それはすべて、今まで福島でできていた生活そのものでした。まだまだ原発事故は収束していま

と、そして福島から避難していき友達がいなくなったことでした。そんな中、夏休みから私の保養に出る生活が始まりました。毎日が普通とは違ってしまいましたが、私たちは国内はもちろん世界中の「福島の子供たちを心配してくださる方々」の助けを借り、学校が休みの時に少しずつ保養をしながら今日まで福島で生活してきました。周囲の除染も始まっていますが、まだまだ原発事故は収束していま

発事故はほんの一瞬で、私たちの「普通の生活」を奪っていったのです。このキャンプに沢山の方々が関わってくださっていることに深く感謝し、そのお気持ちに込められるよう毎日をしっかりと生きて行きたいと思っています。そしていつか、お世話になった方々やご心配して下さった皆様に恩返ししたいと思っています。



せんし、私たちの未来には「保養をまじえた生活」が絶対に必要だと思っています。このキャンプに沢山の方々が関わってくださっていることに深く感謝し、そのお気持ちに込められるよう毎日をしっかりと生きて行きたいと思っています。そしていつか、お世話になった方々やご心配して下さった皆様に恩返ししたいと思っています。

荒野声

昨秋から、教会の祈り会でレビ記を読みました。これまで創世記、出エジプト記と読み終え次はどうしようか、やや戸惑ったが、レビ記に進むことにした。▼出エジプト記の結びで幕屋完成が報告され、レビ記は冒頭から完成した幕屋で献げられるべき礼拝、中心である献げ物について詳細を語る。わたしたちには馴染みの薄い礼拝の仕方だ。しかし、毎週読み進めるごとに新たな発見や教えられることがあった。やはり聖書の言葉だ。▼先日の祈り会で、丁寧な教えられてきたこれらの献げ物を「アロンとその子たちが幕屋にはじめて献げる」ところに至った。神の栄光がイスラエル全体に現わされ民が大きな喜びに与った、とあった。▼この折、按手を受け正教師に任じられ、はじめて聖餐を執行したときのことを思い出した。パンを持ち「キリストの体」、杯を持ち「キリストの血」と告知する声も、パンと杯を持つ手も震えたことを思い起こした。その緊張を生涯忘れてはいけな、と先輩牧師から諭された。また、洗礼を授けられて、はじめて与ったパンと杯に本当に満たされたことも同じく思い起こした。キリスト者としての原体験だ。▼洗礼を受け聖餐に与る。按手を受け聖礼典を執行する。この秩序は守られなくてはならない。手続と秩序を守り民は大きな喜びに与る。

▼埼玉地区新年合同礼拝▲

58教会・伝道所から303名が出席

埼玉地区は60の教会・伝道所の一致と連帯が前進することを願い、年頭に「地区」と名付けて合同の

03名(子ども14名)出席、共に御言葉と聖餐の恵み

を愛することができ、友だちを大切にすることができ、まことの平和がおとずれる」と語った。

大津牧師は「東日本大震災で原発事故による放射能

対策をどうするか。アジア学院は福島県をめぐって議論を繰り返してきた。一昨年、召された前理事長はその中で『神さまの御心に

なっているなら、何とかなる。再建のために一緒にやろう」と言ってくれた。

御言葉により力を得る経験をした。苦みの只中でキリストが共にいてくださる福の祈りがささげられ、喜びを分かち合うときとな

(松本のぞみ報)



成人祝福のため一同祈りを合わせる

2・11は、国民の祝日に関する法律で『建国記念の日』とし、「建国を偲び、国を愛する心を養う」と規定されています。この日は神話上の人物である神武天皇が紀元前660年2月11日に橿原に宮を建て即位した日とされる日で、1874年以来『紀元節』として守られてきたものです。それを、1967年に『建国記念の日』とし、祝日とされました。

けれども、所詮神話です。紀元前660年2月11日が建国の日と考

える人は、少なくとも日本の古代史の専門家の中にはないでしょう。紀元前660年2月11日に、奈良の橿原に、強力な統一国家が建国され、天皇という祭祀と政治を司る大王が存在したと考えることは、通常できないからです。また、統一国家の形成や天皇制の確立、天皇という名称の使用は、紀元645年(一曰の変)から712年

2・11メッセージ

神話がわたしたちの日常生活の中で語られ用いられようとする時には、何らかの意図が存在してしまうということです。その意図に賛同できるならば、その人にとってその意図は感謝と喜びとなるでしょう。しかし、その意図に違和感を感じるならば、その人にとってその意図は苦痛となるでしょう。この国は、神武天皇によって建国された

(社会委員会 釜土達雄)

橋本 通氏(隠退教師)



13年7月10日逝去、91歳。兵庫県に生まれる。東部神学校に学ぶ。46年住吉教会に赴任、大阪長野教会、富田林教会、河内長野教会、千里教会、千里ニュータウン教会を経て、03年まで北大阪真愛教会を牧会し、隠退した。遺族は息・橋本満

藤井俊夫氏(隠退教師)



13年12月5日逝去、74歳。大阪府に生まれる。65年同志社大学大学院を修了。同年鳥取教会に赴任、小山教会、堅田教会、松山城北教会、諫早教会、水口教会、青谷教会、倉吉教会を経て、00年まで津山教会を牧会し、04年隠退した。遺族は妻・藤井純子さん。

事務局報

補教師登録	田中 光	(2013.12.2受允)	木村妙子、樋川一幸、 吉浦玲子、増尾善文	(2013.12.8受允)	正教師登録	宗 羊子	(2013.11.17受按)	牧内寛助、矢田洋子				
井口智子、御館博光、 森田 進、有住 航、 仲程愛美、秀島行雄、 小林久実	(2013.12.8受按)	長谷川直紀、箕口雄介	(2013.12.10受按)	筒井信行、工藤俊一、 三河悠希子	(2013.12.15受按)	都筑讚美	辞(代)岩崎 隆					
〃	就(主)丹羽利夫	大阪東	就(担)吉浦玲子	日本キリスト教協議会	辞教上田博子	日本キリスト教婦人矯風会	就教上田博子	就(担)増尾善文	辞(主)金 珍熙	長崎馬町	浦安	就(代)大数朝祥

『SAYAMA ～みえない手錠をはずすまで～』上映会を全国の教会・伝道所で開催しませんか？

映画『SAYAMA』のDVDまたはブルーレイを、部落解放センターからお貸しいたします。



石川一雄さんは、どう考えても無実です。しかし今も、殺人犯」という罪は晴れていません。そして事件発生から50年が過ぎました。とても悲しく、残念に思います。「部落差別にもつづく冤罪」など、決してあってはならないことがおこりました。そんな中にある一歩ずつ自分の人生を生きて、あきらめないで妻・早智子さんと暮らしている姿が映り、感動をおぼえます。今年の1月2日、石川さん夫妻は朝10時に大阪釜ヶ崎の三角公園に連れられ、大勢の人の前で、支援して下さる方への感謝と「再審」の訴えを力強く話されました。もう1月2日から活動している石川さんを見、聞き、感動を覚えました。また、多くの人の証拠開示要請により、ようやく50年近く経って検察庁は

証拠開示を行ってきました。そのことにより弁護団は裁判所に無実を明らかにする新証拠を提出しました。そのようなことを考えますと、いよいよ大詰めを迎えた感じがします。センター一同は「今がふんばり時」と考え「狭山冤罪事件」再審要求運動の一つとして、全国の教会・伝道所で、映画『SAYAMA』の上映運動を展開しようと考えました。見られた多くの方から「感動をおぼえた、応援したい」という声がよせられていました。ぜひ見ていただいて、感じた思いを伝えてください。貸出し期間は9月末までです。貸出し費用は無料です。詳しい案内はセンターホームページをご覧ください(申込用紙もホームページに添付しています)。

65歳以上の教会員、求道者対象

伝道推進室主催

第1回 主にある命を喜ぶつどい

伝道推進室では、年長者のための集会を望む多くの声をいただいて、年長者を対象とする集会を企画しました。教会を支えている聖徒の皆様が一堂に会し、主にある生を共ににおぼえ、讃美しますことは、大きな喜びとなり、また、力となります。今回は、2日目の午後には森祐理姉の美しい讃美を聴き、また初日と2日目の夕べには多くの方々の愛唱讃美歌を共に歌いたいと計画しております。

◎主 題 「これからの人生を喜び楽しむ
ー主にあつて、ゆったりとー」

◎日 時 2014年3月31日(月)
～4月2日(水)

◎場 所 石和名湯館 糸柳 (山梨県笛吹市)

◎讃美奉仕 森 祐理 姉 (福音歌手)

《4月1日 pm3:00～》

◎講 演Ⅰ 「老いてから生まれる」

小島誠志 牧師 (久万教会)

《3月31日 pm4:00～》

◎講 演Ⅱ 「笑って、笑って、伝道を楽しむ」

石橋秀雄 牧師 (越谷教会)

《4月1日 am9:00～》

◎問合せ先 伝道推進室 (TEL 03-3202-0541)



横浜英和学院



Harriet Gertrude Brittan

宣教師からの声

番外編

偉大な宣教師ブリテン先生

永井 輝男

(横浜英和学院理事長)

《米国美普教会の海外宣教》

横浜英和学院は1880年ブリテン女学校として米国メソジスト・プロテスタント教会によって創立された。この教派は美普（みふ）教会と呼ばれ、1828年に米国メソジスト監督教会から分離独立した小規模な教会であった。教会政治、立法の権限がすべて教職にあるとするメソジスト監督教会のあり方に反対し、教職も信徒も平等で監督や長老を設けずに教会政治を行う教会として成立した。

小教派である美普教会は独自の海外伝道を行う組織を持っていなかった。しかし、米国婦人一致外国伝道協会に参加し協力していた。その中にE. ガスリーがおり、1868年に米国婦人一致外国伝道協会からインドに派遣されていた。ガスリーの父は改革派長老教会の牧師であったが、彼女は美普教会の会員であった。カルカットのミッション・ホームでH.G. ブリテンと共に働いていたが気候が合わず体調を崩し帰米することになった。1872年帰国の途中に日本に立ち寄り、横浜のミッション・ホームで混血の子どもたちの世話を1878年まで行い帰国した。

帰国後、美普教会の総会で活動報告を行ったことから美普教会の婦人外国伝道会が組織された。そして総会で米国婦人一致外国伝道協会に支援するのではなく、美普教会として独自の宣教師を派遣することになった。ガスリーが任命されて日本に派遣されることになった。1880年5月ガスリーは日本に向かう途中、サンフランシスコで肺炎になり急死した。

美普教会にとっては大きな衝撃であった。ここに登場したのがブリテンであった。彼女は

1861年頃から米国婦人一致外国伝道協会のカルカットのミッション・ホームで働き数年間ガスリーと共に働いた経験があった。ガスリーもブリテンを信頼し、同労者と考えていた。ガスリーの後任者としてブリテンが日本に派遣されることになった。

《横浜英和の創始者、 H.G. ブリテン（1822-1897）》

ブリテンは、1822年イギリスで生まれ、幼いときに両親とアメリカのニューヨークのブルックリンに移住した。不幸なことに10歳頃、3階からの転落事故により身体を自由を失った。18歳頃まで病床にあったが、その後、健康を快復した。しかし足に障害を残した。

その障害があるにもかかわらず海外伝道を志すようになり、1854年に米国聖公会派遣の宣教師として西アフリカのリベリアに向かったが熱帯の熱病にかかり米国に送還された。これらの悪条件にも屈せず、次に1861年に米国婦人一致外国伝道協会の派遣宣教師としてインドに向かった。インドの婦人たちや子どもたちに裁縫や聖書を教え、約18年間活躍し、女性宣教師の英雄的なパイオニアと称賛された。

しかし1879年頃米国婦人一致外国伝道協会本部の中心人物であるドリマー夫人と意見が衝突し米国婦人一致外国伝道協会から離別した。帰国後ニューヨークの聖ルカ病院で働き、医療訓練を受け次の宣教活動の準備を行った。57歳の年齢になっていた。

そこへ1880年米国美普教会からガスリーの召天、その後任の宣教師として横浜に派遣されることになった。

横浜山手居留地48番館にブリテンの学校が誕生した。小さな木造平屋で開校し、生徒は4名、フェリス・セミナリー出身の原田良子（りょうこ）が最初の通訳兼助手となり、後に米国婦人一致外国伝道協会にいた根津えい子が加わった。建物の所有はJ.H. パラ宣教師であり、原田の起用はパラ宣教師によるものであった。

ブリテン女学校は着実に成長し1882年に生徒は64名となり、大きな校舎が必要となった。1883年ブリテンは私財を投じて山手居留地120番を購入し寄宿舎を建てた。授業は国語と書き方を除いて英語で行われた。ブリテンは教理問答のドリルと旧約聖書の講話を行った。

初期のブリテン女学校は男女共学で、男子は3分の1くらいであった。当初は混血の子どもたちも入学していた。有島武郎は1884年9月に7歳で入学し、87年に学習院に転出した。

1882年、青年宣教師F.C. クライン（1857-1926）が来日し、美普教会宣教団の総監督に指名された。26歳の新参監督の下に60代のブリテン宣教師が置かれた。クラインはブリテンの教育方針、財政運営を批判し、男女共学、混血の子どもたちの存在、それにブリテンの宗教教育は福音的であるが聖公会風の姿勢であると批判した。実はブリテンは生涯聖公会の会員であった。また正式の高等教育や神学教育を受けていなかった。ブリテンはクラインとの折り合いが悪く、1885年に辞任した。

その後も在日したが1897年健康を害し帰国、米国到着の翌日サンフランシスコのホテルで召天した。横浜英和学院にとっては偉大な宣教師であり創立者であった。

(Kyodan Newsletter より)



音山 幸子さん

人生の岐路の度に思い起こす、恩師の一言



1925年、岐阜県に生まれる。1947年、名古屋桜山教会にて受洗。2005年、山形本町教会に転会。

1937年、広島女学院高等女学部に入學し、「聖書の時間」の授業で、恩師である岡部先生から言われた次の一言が忘れられない。「これからの人生で何かにぶつかった時、必ずこの時間を思い出しますよ」。

卒業後、医学部を目指し名古屋に移住。現名古屋市立医大に入學。その生活の中で、1945年、広島に原爆が投下された。友人、知人と全く連絡が取れない中、翌年12月に広島に向かった。瓦礫の山。訪ねた人々は皆亡くなっていた。その声を話まらせながら語られた。1947年、名古屋桜山教会にて洗礼を受けた。

医師免許取得、そして結婚。明治から開業医を務める山形の

音山さんは言う。「今思えば、人生の岐路の度、岡部先生の言葉が自分を支えていた。洗礼を受けた時も、現職の時も、再び教会に導かれた時も。幼少期の教育、その基盤を作ることがどんなに大切かを改めて思う」。

また最後に「色々なことをして来たけれど、辞めた今はただの人。自分にできる支えを教会の中でして行きたい」と語ってくれた。

東日本大震災国際会議（仙台・東北学院大学）のために実行委員会が立ち上げられてから1年が経ち、開催まであと2カ月を残すのみとなった。教団がこの種の国際会議を主催するのは初めてのことで、はたしてできるのかどうか、当初不安があった。しかし、1年かけて準備をする中で、道が開けてきた。現時点で、参加者は海外から50名近く、全体で200名近くの会議となる見込みである。

この国際会議は、東京電力福島第一原子力発電所事故の問題を正面から取り上げる。これは、我々

にとって大きな挑戦である。しかしこれは、被災者支援活動の中から出てきた必然であると考えている。地震、津波の被災者に対しては、なんとか支援の手をのばすことができたが、原発事故による被

国際会議を目前にして

災者に対しては無力感を味わった。問題があまりにも巨大だからである。

これに対して我々ができる良いことは、海外の諸教会と力を合わせる。

（教団総会副議長 伊藤瑞男）